

広報

さっぽろ

増刊号 2002

特集

都心のまちなみへ



世界都市さっぽろ。
都心の元気がまちの活力。

新たなロマンを都心から



島判官

今から200年ほど前、松前藩の領地だった東西蝦夷地が江戸幕府の直轄領となり、幕府の出先を置くことが検討されました。そのころの札幌は、石狩川のつくる肥沃な土地に密林が広がる自然の地で、アイヌ民族が豊かな文化を築いて暮らしていました。時の幕府普請役は、その様子を「左右平原広々として草木肥えその幅計り難し。……四方総て便利の地にて、相開かるの後は国の府となべき所なり」と記しています(『さっぽろ文庫7』より)

明治2(1869)年、北海道の首都建設という命を帯びた開拓使判官・島義勇が札幌に入り、本格的なまちづくりが始まりました。島判官の構想は、現在の創成川と南1条通とが交わる辺りを基点とし、42間の大通り(現在の大通公園)で街を南北に分けるとともに、12間の道路を縦横50間ごとに走らせ、

碁盤の目のようにするという壮大なものでした。財政窮乏の責任を取り、島判官は3カ月余りで札幌を去りますが、現在の札幌中心部の街並みは、この構想の上に成り立っています。

まちづくりの当初、島判官は円山の丘から東を見渡しつつ、「他日五州の第一都たらん(いつの日かこの地を世界一の都に)」と詠みました。それからおよそ130年。184万の人口を擁するまでに成長した札幌では、世界を視野に入れた、さまざまな交流が繰り広げられています。

先人たちの雄大なロマンと創意工夫の精神が、脈々と受け継がれるまち、札幌。21世紀を迎えた今、その札幌の顔ともいべき都心を舞台に、新たなまちづくりが始まろうとしています。

※1間≒1.82m、42間≒76m



明治6年(1873年)



大正2年(1913年)



昭和10年頃(1935年頃)



昭和32年(1957年)



現在

写真提供 / 北海道大学附属図書館

広報さっぽろ増刊号2002

特集 都心のまちづくり 世界都市さっぽろ。都心の元気がまちの活力。 CONTENTS

[特集1]

魅力ある都心のまちづくりが始まっています 2

[座談会]

世界都市としての魅力を高めるためには 座談会出席者 小林英嗣氏・竹内宏二氏・森下慶子氏 5

[特集2]

都心はこんなふうに変わりつつあります 8

[私の提言] 風土的都市デザインと札幌 伊藤滋氏 13

[スペシャルインタビュー] 21世紀の世界都市とは?

黒川紀章さんが考えるこれからのまちづくり 14

[おわりに]

市長からのメッセージ 新時代の都心づくりを皆さんと一緒に考えていきたい 16

魅力ある都心のまちづくりが 始まっています

札幌市では第4次長期総合計画を受けて「都心まちづくり計画」と「札幌都心地区中心市街地活性化基本計画」を策定しました。

「まちの顔」である都心の魅力と活力を高めるために
市民・商店街・行政などさまざまな主体が
協働でまちづくりを進めるための枠組みが整ったといえます。

これらのまちづくり計画の概要を紹介します。

新しい都心づくりが スタート

二十世紀後半の札幌では、急成長する人口・産業を支えるための都市基盤の整備が積極的に行われ、二十世紀初めの現在、今後の都市活動を支え得る水準には達していません。これからのまちづくりに必要なのは、そうした基盤を有効に活用し、市民生活の向上を目指すことです。そのためには、消費・文化・娯楽・ビジネス・居住といったさまざまな面で、多様な選択のできる都心が必要になります。

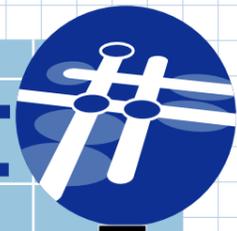
また、人口百八十万人を超えた札幌が、世界的な都市としてこれまで以上に確固たる地位を築いていくためには、「まちの顔」となる都心部が質の高い生活の場であるだけでなく、札幌の特質や美しさなど街の魅力を表現する場であり続けなければなりません。「まちの顔」ともいえる都心の魅力と活力をこれまで以上に高めることが、さまざまな来訪者との交流を活性化させ、新たな産業を育成していくことにもつながります。そして何より、札幌独自の都市文化の創造が期待され、さらなる市

都心まちづくり計画の主なポイント

- 骨格軸**
都心のまちづくりを効果的に展開するための基軸となる通りやその周辺
- 交流拠点**
新たな活動や交流を生み出すポイントとなる、骨格軸の交点や交通結節点
- ターゲットエリア**
軸・拠点と連動したまちづくりの積極的な展開が望まれる地区
- まちづくり促進地区**
都心まちづくり計画のパイロットプロジェクトとなる地区(8ページ参照)



民生活の質の向上にも結び付きます。そんな新しい都心づくりを実際に進めるためには、市民、企業、商店街組織、NPO(民間の非営利)から意見とアイデアを出し合い、協働でまちづくりに取り組むことが不可欠です。



【座談会】

世界都市としての 魅力を高めるためには

「まちの顔」である札幌の都心部をこれからどんなふうに変えていけばよいのか？
都市計画の立場から札幌のまちづくりにかかわってきた小林英嗣さん、
生まれも育ちも札幌市中央区で、狸小路の活性化に取り組んできた竹内宏二さん、
そして全国各地でまちづくりやイベントプロデュースにかかわっている森下慶子さんに
都心づくりを大いに語っていただきました。

札幌発の文化を

小林 これからの札幌のまちづくりにおいて都心を重点的に考えていくのは非常に大切なことです。しかし商業地としての活性化だけを中心に据えていくと、これまでのような商店街中心の狭い枠組みで理解されがちなので、都心の魅力を支える文化的な活動や、人間の生活や街の質の向上を含めた幅広い観点から議論を進めなければならぬと思います。

森下 札幌の街並みを外から見ていて感じるの、都心に観光客がとて

も多いということ。東京にも外から人がたくさん入って来ています。札幌では観光客と市民の区別がつきやすいです。外からたくさん人が訪れるという特徴を踏まえて札幌独自のまちづくりを考えていく必要もあると思います。

竹内 私は人口が三十万人くらいのころから札幌を見てきましたが、昔は駅前通でも狸小路でも生活や仕事と街とが密着していたという気がします。札幌オリンピックを契機に街並みも変わり、古い建物は消えていってしまいました。昔から住んでい

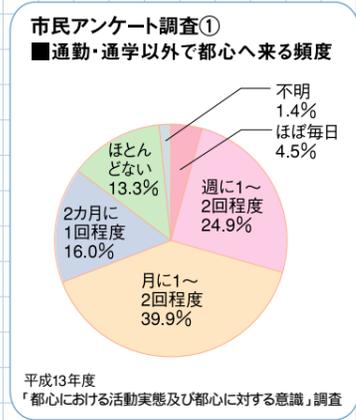
た人たちが、都心から離れていったのです。

今、狸小路の周辺には六つの商店街がありますが、十三年ほど前から自発的に「活性化協議会」というのをつくって、官がリードしてきたまちづくりをもう一度われわれで考えてみようという活動しています。

小林 札幌のように雪の多く降る寒い街で短期間に人口がこれだけ伸びた例は、世界にありません。市民が生活しやすいようサポートする意味で、行政が主導権を取って街の整備を急速に進めなければならなかった

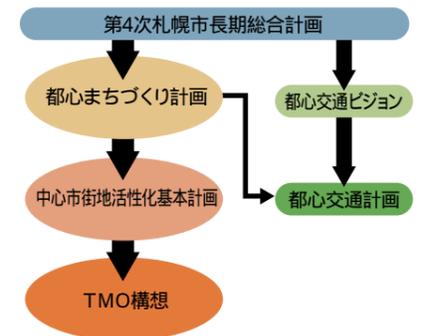


出席者
小林英嗣氏 北海道大学大学院 都市空間計画学研究室・教授
竹内宏二氏 札幌狸小路商店街振興組合理事長
森下慶子氏 (株)カーピー代表取締役・イベントプロデューサー



時期があつたことは事実です。それが役割分担のようになってしまい、これまでのまちづくりが行政任せになってきたといえるかもしれません。札幌のまちづくりは今、都市の重要

■都心まちづくり計画の体系



■都心まちづくり計画の目標と方針
 二つの目標



札幌TMOも発足

平成十一年度からスタートした「第四次札幌市長期総合計画」(平成十二年(三十二年)では、札幌市基本構想で掲げる「北方圏の拠点都市」「新しい時代に対応した生活都市」という二つの都市像を受け、魅力的で活力ある都心整備を目標としています。そしてこの長期総合計画に基づき、都心の魅力と活力を高めるために、平成十四年に都心のまちづくりの長期的な展望を示した「都心まちづくり計画」と、その実現に向けて、当面取り組むべき施策と事業を整理した「中心市街地活性化基本計画」を策定しました。

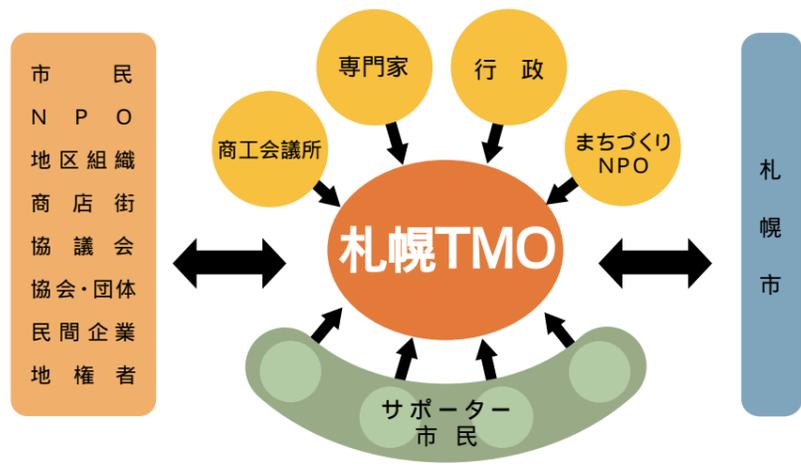
さらに、平成十三年には、まちづくりを交通面から支えるものとして

これからの都心のまちづくりは、商店街、民間事業者、市民、行政などが総力を挙げて取り組むことが必要になります。

そうした都心のまちづくりのコーディネーターとなるのが、TMOです。TMOになれる組織は、中心市街地活性化法で「商工会」「商工会議所」「第三セクター(特定会社・公益

■TMOの役割と各主体とのつながり

- まちづくりの新たな展開方向性の調査・研究と提案
- 地区の枠を越えたソフトプログラムの企画・運営
- 民間主体による個別事業の誘発・支援
- 都心のまちづくりの検討へ多くの人に参加できる場と機会の提供
- 市民の自主的で多彩な活動環境の整備



法人」と定められており、札幌市の場合は札幌商工会議所がその母体となつて、各分野の人々の協力によって運営されています。商工会議所では、商業などの活性化事業の構想として、「札幌TMO構想」を策定し、一体的なまちづくりに取り組むための体制が整備されました。

*TMO
 Town Management Organization (タウンマネジメント機関)の略称。中心市街地活性化基本計画に基づいて創設される認定構想推進事業者(中心市街地活性化法第18条)。



竹内宏二(たけうち ひろし)
(株)竹内商店代表取締役社長。札幌狸小路商店街振興組合理事長。札幌中心部の商店街による活性化協議会を通じて自発的なまちづくりに取り組む。

多様なニーズに応えられる店づくりが街の風景を変えていく。

小林 そうしたものを、市民と行政とがパートナーシップをもってこれからの協働でつくっていくかなければならないのだと思います。協働というのは何か一つのことについて労働を半分ずつ分担してやるということばかりではなく、例えばハードやインフラストラクチャーをつくるのが得意な行政と、楽しくそれを使うのが得意な市民とが一緒になって何かをやることだとも思います。

竹内 最近TMOが札幌にできました。まちづくりのいわばコーディネーター制度です。これから大通、駅前、すすきの地区にそれぞれ活性化協議会というような機関をつくって

協働でつくるまちの顔

そことTMOが街を育てていこうとしています。

森下 行政と市民が話したり、事を進めていったりする上で、間に誰かコーディネーターがいるのは重要なことでしょう。これからのパートナーシップの在り方で言うと、何かやるうとしていてる人に対していきなり支援するのではなく、いろいろな枠組みを用意しておいて、お互いがうまく生かし合える、市民の力が生きたような協働の仕方を生み出していくとよいと思います。

小林 そうですね。それと、これからはまず、商店街やレストランの店舗展開などにもまちづくりがかわってくるようになると思います。例えば街のすてきな景色を見ながら



小林英嗣(こばやし ひでつぐ)
北海道大学大学院 都市空間計画学研究室 教授。札幌市都市景観審議会会長。札幌市・都心まちづくり計画策定協議会座長。北海道都市計画審議会会長などを務める。

都市としての基盤はできた。これから街をどう使うのか。

な基盤づくりをおおむね終え、これから街をどう使うのか、市民の生活や魅力的な活動が行いやすい街へどう変えてゆくのかが、ということを考える段階にきているのだと思います。

森下 札幌には安心して暮らせて仕事ができるという基本的な機能がそろっているわけですから、これからは文化や芸術を含めた質の向上が問われてくるのではないかと思います。

そこから新しい文化を生み出してほしいのですが、残念ながら「札幌発」というものが全国的にあまり聞かえてはきませんね。

小林 ヨーロッパの都市よりも、札幌の歴史は比較的オーストラリアやアメリカの都市に似ているといえます。そうした街の人々と、札幌の市民が違うのは、彼らは街の使い方が

例えば札幌と同じように歴史がそれほどないニューヨークは、世界を代表する文化都市です。それはこれまでたくさんの人種、異文化を都市として受け入れ、サブカルチャーというものを非常に大切にしてきた街だからです。札幌も新しい街ですから、いろいろなものを受け入れ、

ものすごくつまみ、ということですよ。五十〜六十万人の都市の大通公園のようなところでも、オペラをやったとか、とにかくみんな街を使うべきを知っているし、そうした使い方が許されているんですね。

森下 イベントプロデューサーの立場から言うと、今の日本では街の中で

のイベントが非常にしづらいです。さまざまな規制が厳し過ぎて。そうした中でYOSAKOIソーラン祭りなんかは札幌発の立派なサブカルチャーの一つだと思いますよ。

竹内 札幌は歴史の浅いこともあって、豊かな経験や知恵を生かしたイベントやアドバイザーとなれる「旦那」というものがいないんですね。歴史のある街では昔から旦那が祭りや行事の面倒を見てきたのですが、

それと今の札幌都心について言うと、森下さんの言われるようにちょっと街を使おうとすると大変な規制があります。われわれの責任と義務はきちんとルール化して負うべきなのは当然ですが、もつと市民が使えるようにしていくべきだと思います。

札幌は新しい街。いろいろなものを受け入れ、新しい文化を生み出してほしい。



森下慶子(もりした ゆき)
(株)ケービー代表取締役。日本都市計画家協会理事。イベントプロデューサーとして、「国際花と緑の博覧会」「黒部市アクアパークモデル事業計画」などの各種イベント、都市づくり、まちづくりなどの企画、制作、運営にかかわる。

*1サブカルチャー 社会の主流の文化ではなく、ある特定の集団だけが持つ文化的価値や行動様式。
*2インフラストラクチャー 道路・鉄道・港湾・ダムなど産業の基盤となる社会資本のこと。

食事ができるとか、そういう付加価値がレストランなどにも求められてきています。そういう意味で行政が連携していくというのもパートナーシップだと思つてますよ。

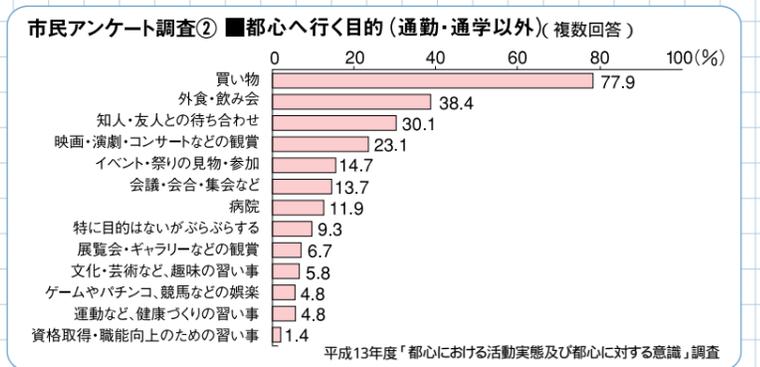
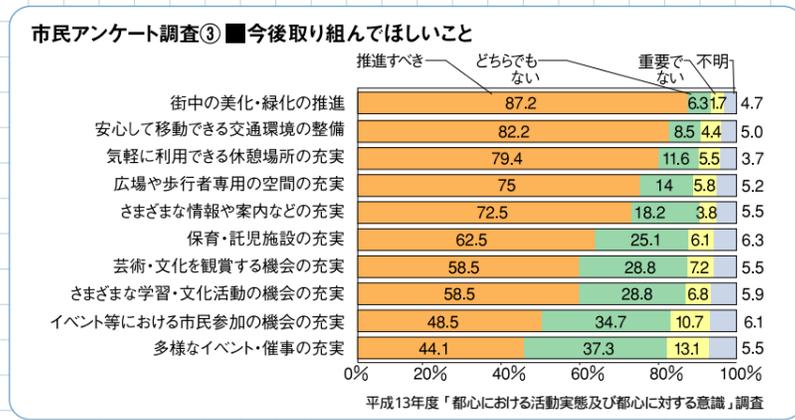
森下 イタリアの街では、中心市街地にレストランを出すとき、しっかりと木といったその地域にある建築資材を使ったら補助事業にしてくれる例があります。また、行政が求めるものと合致すれば、例えば個人のチョコレート屋さんでも支援し、街の風景をつくっていくというふうな例もありますね。

竹内 商店街でも個性を生かした自由で面白い店づくりに各店がもっと取り組んでいくべきだと思つてます。多様なニーズに応えられる店づくりが街の風景も変えていく。

小林 都心の商店街は、十代の若者やシルバー世代といわれる人たちのニーズ、そして世界から訪れる人々が世界都市の質として求めるものに思えらるようなセンサー(感知器)を持つことが必要ですね。

竹内 そういう面でタウンマネージャーを必要としているのが現状です。本当に真剣にそうした意見を聞いていきたいと思つてます。

森下 世代の異なる人たちが異業種の人たちの声をすくい上げるのは意外と難しいのですが、とにかく直接

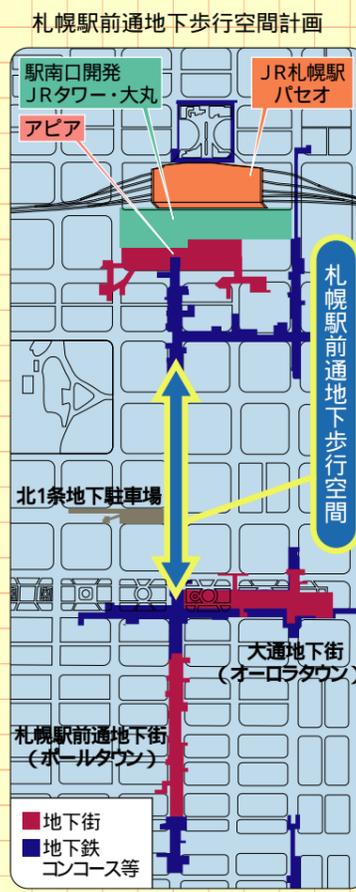




駅前通

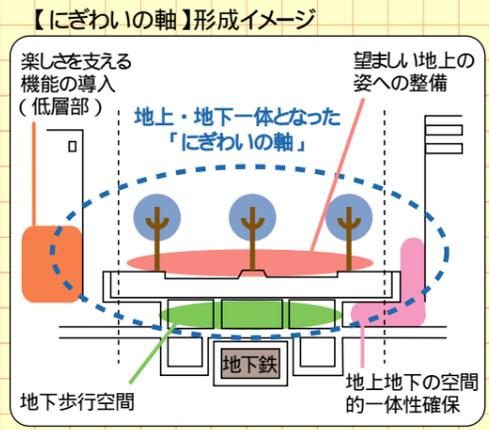
都心は 変わりがつあります

魅力と活力にあふれた都心を実現するためには、都心各地区の特色を生かしたまちづくりが欠かせません。ここでは、現在進んでいる具体的なまちづくりの取り組み事例を紹介していきます。



札幌駅前通地下歩行空間は、札幌駅周辺と大通周辺を結ぶもので、季節や天候に左右されず、誰もが安全・快適に移動できるバリアフリーな歩行空間として計画されています。これら二つの地区を結ぶことにより、都心内を歩き来しやすくするとともに、平成十五年春にオープンするJRタワーなどの新たな開発の効果を都心全体に行き渡らせることで、都心全体の魅力と活力の向上につなげることができます。

これまでのアンケート調査やワークショップにより把握した市民の皆さんの考え方を考慮しながら、駅前通沿いのビルと連携した、にぎ

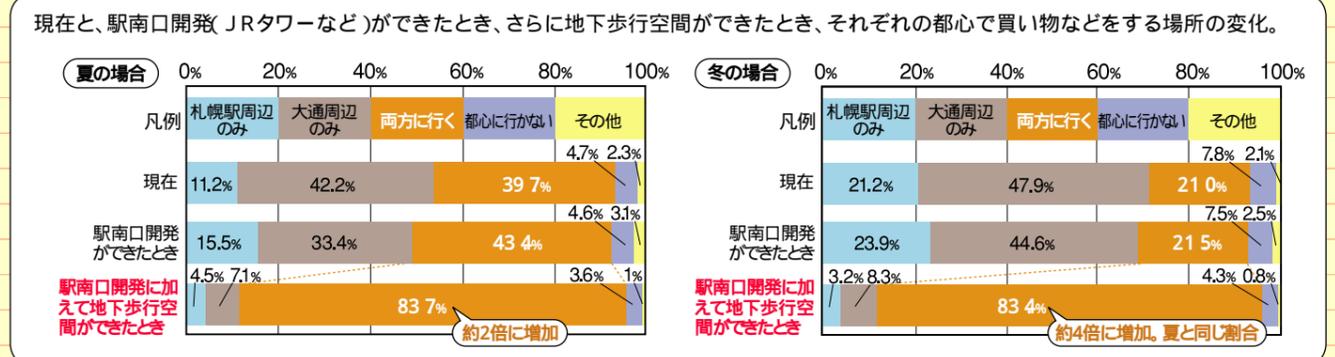


札幌駅前通地下歩行空間計画

わいのある空間づくりを目指して施設計画を検討しており、平成十七年度ころの着工、二十一年度ころの完成を目指しています。

これを、民間都市開発の連鎖的な展開により実現していくことを想定しており、平成十四、十五年の二カ年で具体化のための開発検討調査を行います。

●地下歩行空間による都心の回遊性向上効果（市民アンケート810人）



*1 オープンスペース・ネットワーク 歩行者・自転車道、河川・公園・緑地などの、都市にあるオープンスペースの利便性をより一層高めるためにネットワーク化すること。
*2 バリアフリー 公共的建築物や道路、住宅などで、高齢者や障害者にも配慮された設計のこと。

まちづくり促進地区の動き



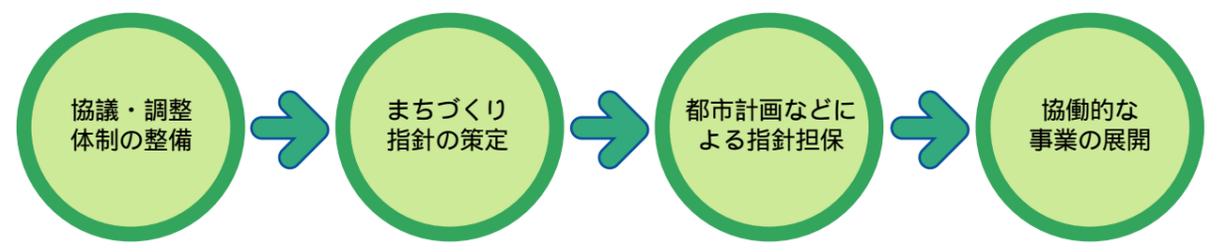
創成川以東地域開発検討調査
札幌都心の創成川より東の地域は利便性の高い場所でありながらその歴史の経緯から、住工混在の低利用市街地になっています。都心まちづくり計画では、ロカルエネルギーシス

「中心市街地活性化基本計画」では、民間都市開発事業を中心とする街区単位のまちづくりの動きを基本としつつ、「都心まちづくり計画」を具体化する上で特に重要と考えられる地区を、まちづくり促進地区として指定し、一体的な取り組みを推進することとしています。

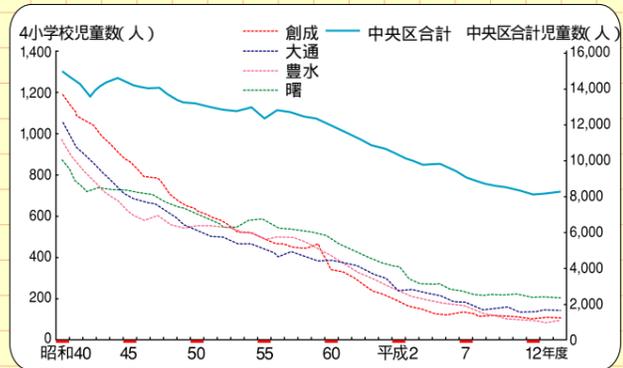
都心における地区別まちづくりの動き

地区別まちづくりの流れ

まちづくり促進地区と駅周辺地区において協議体制が整備されてきています。



中央区および4小学校児童数の推移



変わりつつある札幌駅北口

南三条西七丁目目の創成小学校跡地では現在、都心部子供関連複合施設への建設が進められています。この施設は、少子化を背景として、児童数が著しく減っている都心部四小学校（創成・大通・豊水・曙）の統合校を中心に、「保育所」「ミニ児童会館」「子育て支援施設」を併設した本市初の複合施設です。複合化によって生まれる相乗効果や都心部という立地条件を生かすことにより、子供たちの健全育成という大きな目的を果たすことが期待されています。オープンは、平成十六年四月の予定です。



都心部子供関連複合施設の完成予想図

（仮称）都心部子供関連複合施設



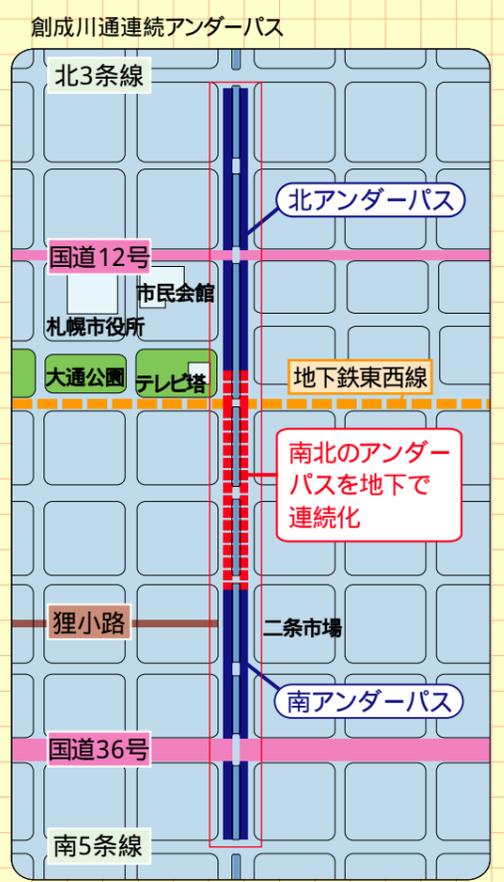
建設中の「札幌エルプラザ」

札幌駅北口8・3地区

札幌駅北口の「8・3地区」は北八条西三丁目では来春、北口広場に面した民間施工の再開発ビル「札幌エルプラザ」がオープンします。この再開発ビルの二階から四階に、「男女共同参画センター」「消費者センター」「市民活動サポートセンター」「環境プラザ」(いずれも仮称)が設置され、より利便性の高い市民の活動拠点施設となります。オープンは平成十五年九月の予定です。



都心部子供関連複合施設を建設中の創成小学校跡地



現在の創成川のアンダーパス

市では、中央区創成川の南アンダーパスと北アンダーパスを結び連続化させる事業を進めています。都市計画道路である創成川通は、都心南北交通の主軸であり、また、道路中央に位置する創成川は、歴史的なシンボルであるとともに、札幌の街並みにおける南北の軸ともなっています。計画では、現在ある二つのアンダーパス（南五・南三条線・南二条線、南大通・北三条線）を連続化し、南五条線から北三条線までを一気に抜けられるようになります。これにより、都心部を利用する交通と、

創成川通アンダーパス連続化計画

10年間の段階的実行プラン

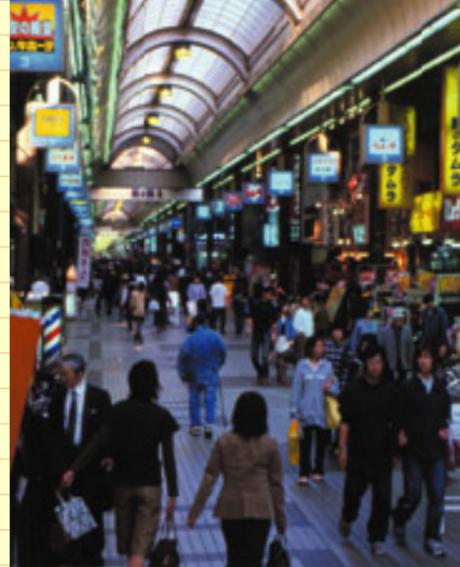
人と環境を重視した都心交通計画とは？

札幌の交通基盤は、ほかの政令指定都市と比較して高い道路整備水準にあります。しかし近年、都心の交通量は横ばいであるにもかかわらず、都心に目的のない通過交通が1日に9万台あることや、路上駐車が増加していることにより、都心内道路の混雑状況が悪化しています。また、歩行者が都心に求めるものも多様化しており、都心におけるさまざまな活動を支える交通体系の実現が求められています。



このため札幌市では、10年間で実施可能と考えられる施策の段階的な実行プログラムを策定し、都心のまちづくりを交通面から支える新しい時代の都心交通の実現に向けた計画として、平成15年度末をめぐりに「都心交通計画」をまとめる予定です。

創成川の河畔では、アンダーパスの整備に合わせて潤いと憩いの空間を創出することも予定されており、地域の活性化も期待されています。この事業は平成十六年度の着工、十九年度の完成を目指しています。通過するだけの交通が分離され、交通混雑の緩和が期待されます。また、地上交通量の減少により、歩行者の安全が確保されるほか、騒音の低減により都心環境の改善も図られます。



人でにぎわう狸小路商店街

札幌TMOが取り組む狸小路商店街・大通地区・すすきの地区の支援活動

札幌商工会議所が都心のまちづくりを進めるために策定した「札幌TMO構想(中小小売商業高度化事業構想)」が今年七月、中心市街地活性化法に基づき認定を受けました。それを受けて発足した「札幌TMO」は、札幌商工会議所に設置された、まちづくりを運営・管理する機関です。

都心では市民・商店街・地区組織・民間企業・NPO・行政機関などがさまざまな活動を展開しています。札幌TMOはそれらの団体と協働し、連携を図りながら、都心の活性化につながる事業の調整役となります。現在進んでいる狸小路のアーケード改修事業では、TMOが国の支援制度の導入などの調整や支援を行い、事業主体である札幌狸小路商店街振興組合と協働で商店街の活性化に取り組んでいます。これにより、アーケード自体の更新だけでなく光ケーブルの導入、サインボード、防犯カメラの設置なども行われ、回遊性の高い歩行者モールとして新たな魅力が加わります。

大きな効果が期待される、大通地区共通駐車券システム開発事業」を実施するため、地元商店街を中心としたプロジェクト・チームを設置し、来年のスタートに向けて準備を進めています。



すすきの地区

国の都市再生施策とは?

国と協力して 都心まちづくりを 推進!

国(都市再生本部)では、「20世紀の負の遺産の解消」と「21世紀の新しい都市創造」を方針に掲げ、都市再生プロジェクトの選定や都市再生特別措置法の制定など、都市再生を通じた構造改革に取り組んでいます。



札幌市では、7月に都市再生プロジェクトの4次決定として、「歩いて暮らせる豊かで快適な都心の創造」と「環境負荷の低い新たなエネルギー有効利用都市の構築」を内容とする、「人と環境を重視した都心づくり」が取り上げられました。

また10月には、都市再生特別措置法の規定に基づく「緊急整備地域」として「札幌駅・大通駅周辺地域」と「札幌北4条東6丁目周辺地域」の2地域が指定されました。

これら一連の国の施策と連動させながら、都心のまちづくりを効果的に展開していきます。

私の言



風土的都市デザインと札幌 伊藤滋氏



伊藤滋(いとう・しげる) 1931年生まれ。早稲田大学理工学部教授。東京大学名誉教授。専門分野は都市防災、都市計画。札幌市・都心まちづくり計画策定協議会顧問。



北海道の風土は、北欧やアメリカ北東部に似ているとよく言われる。森や林を歩き、広大な農地を眺めるとき、確かにその共通性を感じる。光と陰影がつくりだす自然環境の美しさは素晴らしい。北海道が備える風土的特質はこの光の鮮やかさと清明さであろう。

しかし、自然が与える光と陰影の感動を、都市において受けるであろうか。その答えは否定的である。都市は北海道が誇る光の贈り物を十分に生かしていない。風土とは、自然環境と人工環境が共同してつくりだす文化的表現といえる。そうであれば都市という人工

環境をより質の高いものにしていかなければ、北海道の風土は高い評価を受けられない。

北海道の風土性、そしてその都市における空間的表現について私は定見がない。言えることは、少なくとも東京の建築群やその市街地像と同じではないといふことである。そして他方で、北欧諸都市のイメージ・シジョンであってはならないといふことである。幸い北海道の諸都市には、本州と比べて道路や公園などの公共用地が十分にある。問題は、その空間の質が必ずしも高くないこと、道路や公園と建物の関連につい

ての配慮が十分でないことである。建築の立場で街並みを整える努力をすれば、それに伴って道路や公園のデザインの質を高める必要性が明らかになる。これからの時代、都市景観自体が経済を活性化させる重要な存在になると言われている。ストックホルムやヘルシンキが、それぞれの国家の中核として国際的経済の中で健闘しているのは、その都市自体が美しく文化的個性を備えているからである。札幌は北海道の首都である。その札幌に都市的魅力が備わっていないならば北海道の経済成長は期待できない。

札幌の中心部の方向性については、これまでいろいろ検討が加えられて、一定の成果を挙げたが、その内容は土地の高度利用や経済活性化が中心であり、アーバンデザインの議論は十分にされていない。その点に関して特に言いたいことは、大通公園とその周辺の建築群である。この街並みについて北海道の風土性をつくりだせる景観のイメージを衆知を集めて生み出す時期にきていると思う。

二十一世紀の、風土に立脚した都市デザインを、ぜひ札幌で確立していただきたい。

21世紀の
世界都市
とは？

黒川紀章さんが考える これからのまちづくり

ドイツ、シンガポール、マレーシア、中国、カザフスタンなど世界の各地でまちづくりに取り組む黒川紀章さん。「共生の思想」を提唱する世界の建築家・黒川紀章さんに、快適な都市空間と二十一世紀のまちづくりの在り方についてお話を伺いました。



黒川紀章(くろかわ・きしよ) 一九四四年名古屋生まれ。京都大学建築学科を経て東京大学大学院博士課程修了。日本芸術院会員、カザフスタン共和国首相顧問、中国深圳市都市計画顧問。機械の時代から生命の時代への変革を貫いてきた活動が評価され、建築界のイベル賞ともいわれるフランス建築アカデミーのゴールドメダルを受賞。主な作品に国立文楽劇場、パンフレック・タワー(フランス)、クアランプール新国際空港(マレーシア)など。



「エコ・コリドール」が巨大ビル間に伸びる「ワン・ノース」の完成予想図

「エコロジー」と「文化」が街の起爆剤

私がマスタープランをつくり、現在シンガポールで進められているまちづくりに「ワン・ノース」というプロジェクトがあります。これは、シンガポールの中心部に位置する二百五十ヘクタールの広大な土地を再開発して、今までにないまったく新しい発想の街を世界で最初につくろうというものです。

ワン・ノースのコンセプトはバイオポリス、ICTポリス(テクノポリス)、メディアポリス、という三つの拠点地域をつくり、さらに、そこに今までにない人工の自然をつくらうというものです。人間だけではなくて鳥や昆虫、小動物などが通行できる通路を都市につくるものです。私はこれを「エコ・コリドール(生態回廊)」と呼んでいます。

起爆剤です。ワン・ノースのプロジェクトでは、いかにして世界のアーティストや学者、ミュージシャンなどのクリエイターを呼びこえるか、街をつくるか、その人たちが来て住みたいと思う街にできるか、それを基本に考えているのです。

その結果、世界中のアーティストや研究者がパリに注目して観光客が年間数百万人増えました。文化施設が観光産業を刺激したのです。



二十一世紀のまちづくり、キーワードは「共生」

私はちょうど四十年前に日本で初めて「共生」という思想を提唱しました。今ではみんなが使っているようになりましたが、私の言う「共生」という考え方によってつくられた街は、まだ世の中に十分実現してはいません。

これからのまちづくりに必要なコンセプトは、まず「経済と文化の共生」です。文化と共生した街とは、文化施設や新しいライフスタイルを取り入れた街という意味ばかりでなく、歴史と共生している街でもあることが重要なことです。それは何も古いものを復活させるということではなく、新しい街の中に何となく、あ、ここは

昔のレンガ街があったところかな、などと思わせる、記憶を思い起こさせるようなまちづくりの方法があるんです。これを私は心象風景のランドスケープと呼んでいます。それともう一つ、部分と全体の共生というコンセプトがこれからのまちづくりに必要です。例えば東京は三百の小さな都市の集合体であると

するので。札幌なら六十の小さな都市の集合体であると置き換える。札幌の中で特色のある地域をたくさん見つけて、それぞれの地域がより個性的になっていく方が街全体としては面白い。札幌という街を一つの個性でデザインするのではなく、六十の都市の集合体とする考え方を、部分と全体の共生」と私は呼んでいます。そして最後に言いたいことは、やはり「自然と人間との共生」、「自然と都市との共生」です。先ほど言った、エコ・コリドールという概念ですね。たとえば札幌という都市の中の自然を考えると、大きな大通公園が真ん中にある、中型の公園などが各地区にばらばらとあって、さらに子供のための小さい遊び場がばらばらある。しかしそれだと、昆虫や小動物が住みにくい街です。だからバラバラの公園や自然をつなげていくことがこれから大切になっていきます。

街中が緑のネットワークでつながっていかば、当然歩行者にとっても快適です。常に緑のあるそういう歩行者専用の道が整備されることによって、車と人との共生も可能になるし、さらに「自然と都市の共生」が可能になる。私はこれからのまちづくりにはこの視点も大変重要になってくると思います。(談)

新時代の都心づくりを 皆さんと一緒に考えていきたい

数年前、一枚の古い写真を目にする機会がありました。それは、大正初期に撮影した札幌の市街地の写真です。古めかしい木造家屋が立ち並び、広々とした大通公園が西に向かつて延びており、その後の街の発展をイメージさせるものでした。

大正初期而言えば、今から九十年ほど前。この間、人口の急増や経済の成長に伴い、札幌の都心は大きく変化してきました。現在の市役所から見える大通公園は、両脇の高いビルに挟まれて、当時と比較すると、狭くなったような錯覚を起すほどです。そして、そうした都心部の変遷に思いを巡らせる時、私はいつも、百年後の札幌の街並みをも思い描く

のです。

ご紹介した通り、市では都心まちづくり計画に沿った長期的な視点で、都心の魅力と活力を高めるまちづくりを進めています。都心は、その街の魅力と特徴を凝縮したものであるべきです。私はその根底に「環境」と「文化」を据えたいと考えました。

具体的には、駅前通、大通、創成川通、北三条通という四つの骨格軸を中心とした拠点づくり、空間づくりを描いています。また、市民一人ひとりの生活や考え方が多様化する中、消費、娯楽、居住、ビジネスなど、さまざまな面で自由な選択ができるような都心にしたいと考えています。こうした新しい時代の都心づくり

を着実に進めていくためには、市民、企業、商店街組織、NPO、行政などさまざまな主体がそれぞれの役割を分担しながら、協働で取り組んでいく必要があります。それにはまず、まちづくりの目標や方針を明確化するなど、効果的に事業を展開していくための環境づくりが欠かせません。

今回の増刊号では、そのきっかけとするために、都心の将来像をはじめ、関係の方々の声や今後の課題などを紹介しています。お読みになった皆さんにも、ぜひ「世界都市さっぽろ」の顔となる都心とはどうあるべきか、都市生活の魅力にあふれた都心とはどのようなものか、一緒に考えていただきたいと思います。



かつらのぶお
札幌市長 桂 信雄

本誌に対するお問い合わせは

- 都心まちづくり計画について
企画調整局
都心まちづくり推進室
☎211-2692
- 都心交通について
企画調整局
総合交通対策部都心交通担当課
☎211-2254
- 札幌駅前通地下歩行空間について
企画調整局
総合交通対策部施設計画担当課
☎211-2492
- 創成川通連続アンダーパスについて
建設局土木部街路課
☎211-2622
- 北口8・3地区について
市民局男女共同参画推進室
男女共同参画課
☎211-2962
- 都心部子供関連複合施設について
教育委員会総務部配置計画担当課
☎214-4507

札幌市ホームページ

<http://www.city.sapporo.jp/city/>

Eメールアドレス

kohokakari@somu.city.sapporo.jp

ご意見・ご感想を お寄せください

この冊子をご覧になった皆さんの自由なご意見・ご感想をお待ちしています。添付のはがき(料金受取人払い)をご利用ください。封書やファクス(FAX218-5161)、Eメール(上記アドレス)でも結構です。封書・ファクス・Eメールの場合は、住所・氏名(ふりがな)・年齢・職業・電話番号を記入し、〒060-8611 札幌市中央区北1条西2丁目 市役所広報課までお送りください。平成15年1月31日(金)消印有効)までにご意見・ご感想をお寄せいただいた方の中から抽選で30人に特製ウイズユーカード(1,100円分)を差し上げます。お寄せいただいた声は、今後の関連施設の参考にさせていただきます。